

カトマンズ・バレー点描

～「天空と大河の間で」(続編)～

2008年11月 単独

ここ数年は毎年ヒマラヤに出掛けているので、カトマンズ滞在中に市内のダウンタウンであるターメルや古い寺街のパタン、火葬で有名なヒンドゥー教のパシュパティナート寺院、仏教のボダナート寺、モンキー・テンプルとして有名なスワヤンブナート寺、国立博物館などには飽きるほど行った。

ネパールの首都カトマンズはカトマンズ・バレーと言われるように、周囲を山や丘に囲まれた盆地である。今回はキャズリ峰登頂に敗退したので、帰途インド・ベナレスに旅行しても未だ日程が余った。カトマンズからのどの出国便も皆満席で帰国便を早めることができず、インドからカトマンズに戻ってから5日間ほどカトマンズに留め置かれる次第となった。

余談であるが、今回は飛行機に関してはついていなくて、下山の際のルクラ空港が霧で閉鎖されたためにカトマンズに戻れず、ルクラでも3日間足止めを喰った。お蔭で、狭いルクラの町の呑み屋は大から小まで、優から劣まで全てハシゴをすることができた。

横道に逸れたが、そのような訳で、カトマンズでの暇つぶしに普通は滅多に行かないカトマンズ・バレーの郊外や鄙びた辺境を暇に任せて歩いてみた。何しろ、朝起きてから夜にホテル隣のビアガーデンや裏町のホルモン焼屋に通うまでは、時間は売るくらいあったのだから・・・。そのような次第で、今回歩いてみたいいくつかのスポットを紹介したい。

- [1. キルティプールとトリブヴァン大学](#)
- [2. 雨降神の住む村・ブンガマティー](#)
- [3. 東の仏教伽藍・バクタプール](#)

【紹介スポットの位置】



1. キルティプールとトリブヴァン大学

キルティプール (Kirtipur) は、カトマンズ市街から西 5 km ほどの所にある山上の町で、かつてはカトマンズ王国国境の城砦都市であったそうだ。部族もカトマンズとは違うジュアプー族 (カトマンズバレーの典型的な農業部族) が住んでいるそうで、それゆえ、カトマンズとはまた違った古い生活様式が今でも残っているそうで、食指が動いた。その麓に、ネパールの最高学府トリブヴァン大学 (Tribhuvan Univ.) がある。日本の東大に当たる。我がカトマンズのエージェント HSA (Himalayan Sherpa Adventure) 社長のフルバ・ギャルツェン・シェルパもここの出身である。ちょっと余談になるが、彼は元々はルクラの少し先のチャウリカルカ村の貧しい家に生まれ、少年時代にはポーターをしていたが、あるドイツ人のトレッカーの目にとまり、彼が学資を出してくれてトリブヴァン大学の大学院を卒業した経営学修士である。ネパール社会の中ではシェルパ族は今でも役人や先生にはなれず、また中央の企業にも勤められないという低いカースト[†]に属しているが、フルバはネパール・トレッキング・エージェント協会の事務総長まで務めた刻苦勉励の士である。ルクラからクーンブ・ヒマールに行く度に、今は簡易ロッジをやっている彼の生家に立ち寄って行くが、ご両親とも品格のある人士である。シェルパ語しか喋らないので細かいコミュニケーションはできないが、お茶を頂いてその顔を見ているだけで何か心が和んでくる雰囲気だ。

さて、そのような訳で、彼が卒業したトリブヴァン大学も見なかったし、少しその先に足を延ばせばキルティプールに至るので、ホテルから約 10 km の砂埃の道をテクテクと歩いて行った。歩くということはタクシーやバスでは見えない風物に接することができ、興味が湧けば現場に立ち止まって子細に見物することもできるので、喉が渇いたり足が草臥れたりするが楽しいものである。下の左の写真は途中の町中で見たガート (露天火葬場) である。火葬台は普通は左写真のような円形の台が一般的であるが、右はレール形式の珍しいものであった。



また、右は河畔のスラム街のテントである。真ん中のテントには“MAKE it LAR??”と書いてあるが、隠れた文字を推測するのも楽しいものである。皆さんは如何推測されるであろうか。私は「キョーレオピン」とか言うソノ筋の薬を想像した (MAKE it LARGE !!!?)。このようなスラムでも、或いはスラムゆえにその手の需要は旺盛であるものと思われる。



話が下世話になったので、インテリジェントな話題に戻そう。トリブヴァン大学への道には標識などは全然見当たらず、かなりウロウロと探さざるを得なかった。やっと見つけた正門はどこかの掘っ立て小屋の裏口のようなシロモノだった。正門をくぐってからは広大な斜面にキャンパスが広がっていて、正門から天辺まで坂を歩いて1時間くらい掛かった。草ぼうぼうの原っぱの所々に校舎が点在しているスタイルであった。



(トリブヴァン大学の正門)



(キャンパス全景。左奥、遠くに見える白い山はヒマラヤ)



(中央図書館)



(コンピュータ&情報科学部)



(大学本部)



(何かの学生集会?)

トリブヴァン大学は、流石ネパールの最高学府だけあって、学部も文学系、法律・経済学系、社会学系、理工学系、医学系、農学系が揃っているようだった。ぶらぶら歩いていたら、物理学科の建物もあったので昔を思い出して懐かしくなり、建物の中に入って廊下を歩きながら研究室に掛かっている表示

などを眺めていたら、大学院生という学生に掴まった。「お前は日本人か？ならば、〇〇大学の△△という先生を知っているだろう。今はここで材料力学とやらを教えている。紹介するから会いに行こう」とノタマツた。

オイオイ、ちょっと待ってくれ。俺が卒業したのはもう半世紀近くも前だぜ。それに拙者は同じ物理学でも原子核物理学出身だ。そのような先生はご存知ござらぬヨ。その△△先生とやらに会って、「これは丁度良いところに鴨がネギを背負ってやって来たワイ。久しぶりに日本語でウンチクを垂れてやるとするか」などとやられたのではかなわないから、折角のご好意ではあるがやんわりとお断りし、その代わり研究室の実験室を見せて貰った。古色蒼然たる計測器が1、2台あるだけのシロモノであった。日本では半世紀前に姿を消した小型のオッシロスコープであった。まあ、ネパールというお国柄では致し方ないであろう。

工学部はカトマンズ市街地にある。昨年山の帰りにパンチョ君と二人で見学に行ったが、工学部の設備も似たようなもので、日本の工業高校のレベルにも遥かに及ばないものだった。理工系は、実験設備が命であるので、日本のJICAあたりの積極的な支援を望みたい。

キャンパスの一番天辺には大学生協があった。文具店や雑貨店は粗末なものであったが、本屋だけは充実していた。特に語学関係とコンピュータ関係は欧米の最新本が並んでいた。しかも“**For Sale in Nepal Only**”という、定価の2割以下の特価であったから、日本で買えば相当高価な

OXFORDの英々辞書と**COLINS**の**Spanish-English**の辞書を買ってきた。どちらも重い本であるから、歩いてホテルまで持ち帰るのに苦労したが・・・。

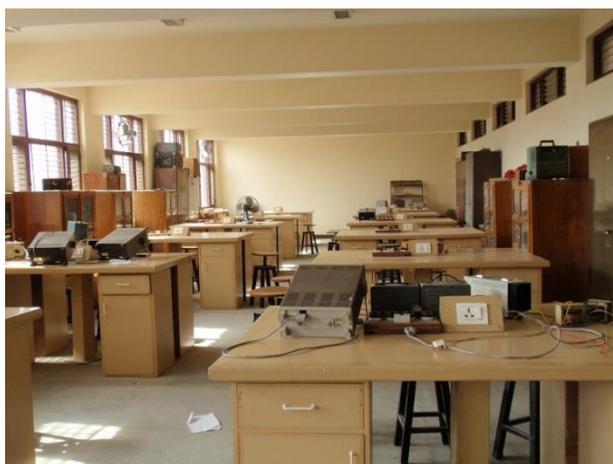
大学のキャンパスをブラブラと一周してから、キルティプールの集落へと登って行った。その前に乾いた喉にビールの一杯でも流し込んでやりたかったが、この辺は全くの田舎であるので残念ながらそのような店は全く無かった。汗をダラダラとかきながら、ウネウネとした坂道をキルティプール目指して登って行った。

キルティプールは確かに古い城砦の佇まいを今も残している山上の小さな町であった。カトマンズ盆地にポカラなどの西方から入城するには、今は大きな幹線道路が通じているが、昔はこのキルティプールの山越えの小さな道が1本あっただけで、この村は関所の役目をしていたのであろう、城砦の建物の中に人が住んでいるという風情の町であった。

そのためか、通路は迷路のように狭く、両側には日干しレンガの古色蒼然たる建物が密集していた。生計は農業で立てているのであろうか、麦やトウモロコシが干してあった。ビールを飲みたかったが、



(物理学科本館)



(物理の実験室。机は新しそうだが・・・)

食堂などは1軒も無かった。迷路をグルグル歩き廻ったが、観光客などは滅多に入らないらしく、胡散臭げにジロジロ見られて気持ちが悪かった。集落の天辺にある仏教寺院に登ってみた。西方には2回ほどバスで行ったポカラ方面への曲がりくねった峡谷の険路が見え、東方にはカトマンズ盆地を一望、さらに北方にはヒマラヤの峰々も霞んで見えた。確かにカトマンズ王国への敵の侵入を防ぐための城砦にふさわしい町であった。

帰途も遙か彼方に浮かぶヒマラヤ連山を眺めながら、3時間ほどテクテク歩いてカトマンズのホテルに戻った。下はかつての城塞の町・キルティプールの佇まいである。



<後註†>ネパール社会のカースト

ネパールにはインドのような厳密なカースト制度は表面上は存在しないが、裏ではカーストや人種差別が生きている。特にクーンブ地方（ヒマラヤ山間部）に住むシェルパ族はかつては社会的に非常な差別を受けてきた。ヒマラヤ登山やトレッキングの仕事に従事するようになってからはカトマンズ中央でも多少の評価を得るまでになってきたが、それまでは中央社会からは阻害され、官吏などの職業に就くこともできなかった。カトマンズではシェルパ会館が設置できたのがやっと数年前であるという事情がこの間のことを物語っている。最近ではエベレスト初登頂のヒラリーが寄付したクムジュンのヒラリースクール出身者が中央でも活躍し始めてはいるが、その数は未だ非常に少ない。



(日がな一日中、干した麦の鳥を追う少女)

2. 雨降神の住む村 ブンガマティー村

暇を持て余して何処に行こうかとカトマンズ・バレーの地図を眺めていたら、パタンの南方に面白そうな場所がありそうに思えた。カトマンズ盆地南端のドンヅマリの山の上で、その向こうは高い山に遮られた辺境であるように見えた。面白い村があるかも知れないと地図に付記された簡単な「名所案内」を調べてみた。たった3行の記述であったが、以下のように記されていた。

Almost a Tuscan village from a distance with all roads to the central plaza, Bungmati is home to the Machhendranath deity(the patron of rain) and a paragon of medieval lifestyle.

(Himalayan Map House 5万図幅)

何故にネパールにイタリアのトスカーナ建築様式 (Tuscan) の村があるのか？トスカーナ様式とは柱が無い建築様式だそうだから、日干し煉瓦を積み上げただけの長屋がズラッと繋がっている集落かもしれない。しかし、マチェンドラナートと言えば、ネパール王国に君臨したかつての名君の名前ではなかったか。これはきっと由緒正しい村に違いない。代々の国王が帰依した神聖な寺院があるのかも知れないナ。相州大山の「大山雨降神社」の如き集落でもあるのかな。それに“a paragon of medieval lifestyle” (中世の生活スタイルを守っている典型的な村) というのも面白いではないか・・・と出掛けてみた。

ホテルからは15kmくらいの道程であるが別に急ぐ旅ではないので、パタンを経由して歩いて行った。一応地図は持って行ったのであるが、ネパールの田舎には地名や方向を指す標識は滅多に無く、また、その辺を歩いている人に道を聞いてもサッパリ要領を得ないから目標のブンガマティー村に辿り着くのに随分往生した。途中には、畑ばかりで人家が全くない野原の中の一本道も長かった。



(ブンガマティー村への途中で 羊も連れて)



やっと辿りついてみると、何と観光バスが停まっているではないか。乗客は外国人ツアー客であった。ああ、草臥れた。マ、自分の足で歩けば、それだけ楽しみも多いというもんだ。とりあえず村の入口の広場前に雑貨屋兼一膳飯屋 (次頁中右) があったので、カンビールを買って路傍の壊れた椅子に座って飲みつつ辺りを観察した。やはり期待していたような古色蒼然たる村であった。鶏が歩き回っていた。村の中を歩いてみた。前項のキルティプールの村と同様、ここも日干しレンガでできた相当に年季が入った建物ばかりだった。生業はやはり農業で、収穫した麦やトウモロコシがところ狭しと干してあった。

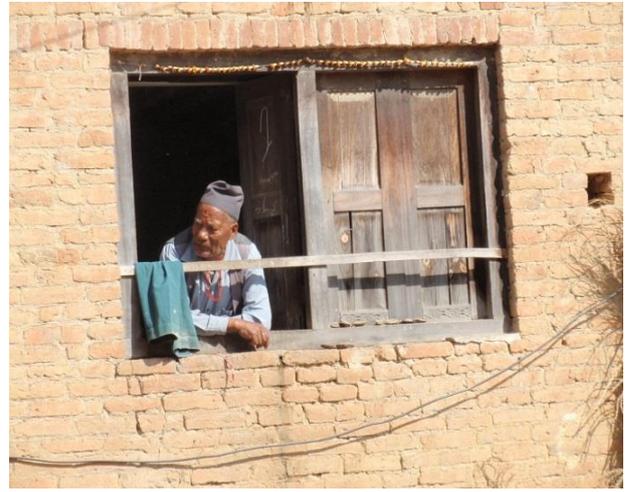


(村の入り口広場)



(収穫した穀物を干している)

パタンなどでもそうであるが、ここでも暇な老人が窓から首を出してジッと外を眺めていたり、瞑想に耽っていたりしていた。人の動きは多少はあるのだが、何か時間が止まったような、過去にタイムスリップしたような静かな昼下がりであった。時々、鶏が鳴くだけで物音も全く聞こえなかった。



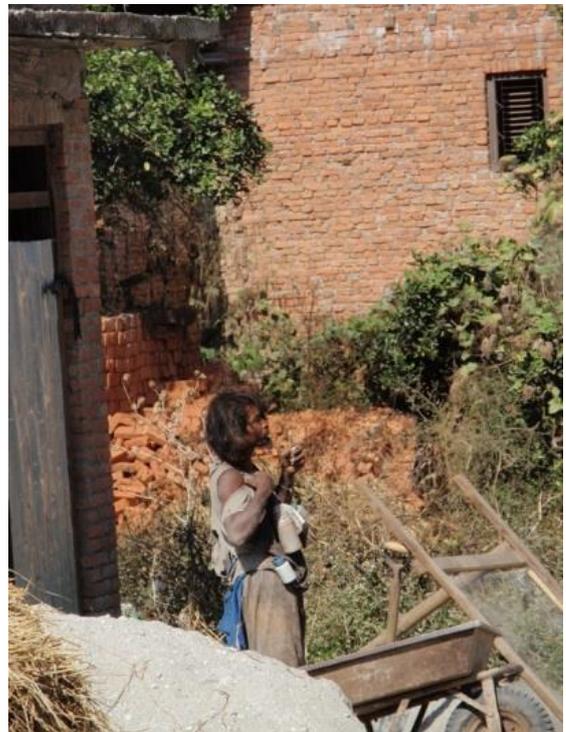
集落の天辺にある寺院にも行って見た。小さな無住の寺院であったが、これが雨降神社であったか。何か神々しい雰囲気を感じられる境内であった。マツチェンドラー寺院という。地元の人が修理のためか、日干しレンガを積み上げていた。ネパールには「生き神クマリ」という伝統があって、これは一人の少女を国の唯一の「生き神」としてパタンにある「クマリ館」に住ませ、国事行為も司さどらせる巫女であるが、このクマリを代々輩出するのが、此処ブンガマティーであると聞いた。

また、「大山雨降神社」の御師のような集落は見当たらなかったが、パタンとともにネパールでの仏具の生産が多い村でもあるそうだった。何かそのような厳かな雰囲気を感じさせる村だった。同じ寺街であってもパタンや次項で書くバクタプールなどの参詣客や観光客で犇めく観光地とは違って、静謐が支配する土地であった。カトマンズから車で1時間程度で行けるので、機会があったら、是非訪れてみたら如何であろうか。



(マツチェンドラー寺院)

(裏町で見た土木労務者 ⇒)



帰途もまた、ブラブラと歩いて帰った。途中、見晴らしの良い洒落たレストランがあったので、その四阿でビールを飲みチキン・チリーを喰って減った腹を満たした。貧しい佇まいのブンガマティーの村がすぐそこにあるとはとても思えないような、一気に王侯の避暑地にでも紛れ込んだような気がするレストランだった。たぶん、カトマンズの金持ちや在住の外国人企業家などが運転手付の自家用車で来るような場所であろうか。

ここは丁度カトマンズ空港に着陸する旅客機の航空路にも当たっていて、国際線で入ってくる飛行機の尾翼のマークが良く見えた。日本では見られない珍しい航空会社のものが多く、飽かずに眺めていると空ビール瓶の数も増えるのだった。



(ブンガマティー村全景)



(熱帯の花が咲き乱れたレストラン)

(「雨降神の住む村 ブンガマティー」の項 完)

3. 東の仏教伽藍 バクタプール

カトマンズ市街の東 15km くらいの所にパタンよりも小規模ではあるが、寺院が 100 ほど並んでいる仏教伽藍の寺町がある。ここはキルティプールと同じく昔は典型的な農業部族のジュアプー族が独立王国を作っていた。宗教心が厚い部族で、その王様が 14 世紀に作った都である。同じ寺町でも、喧噪のパタンよりよほど静かだと聞いて出掛けてみた。

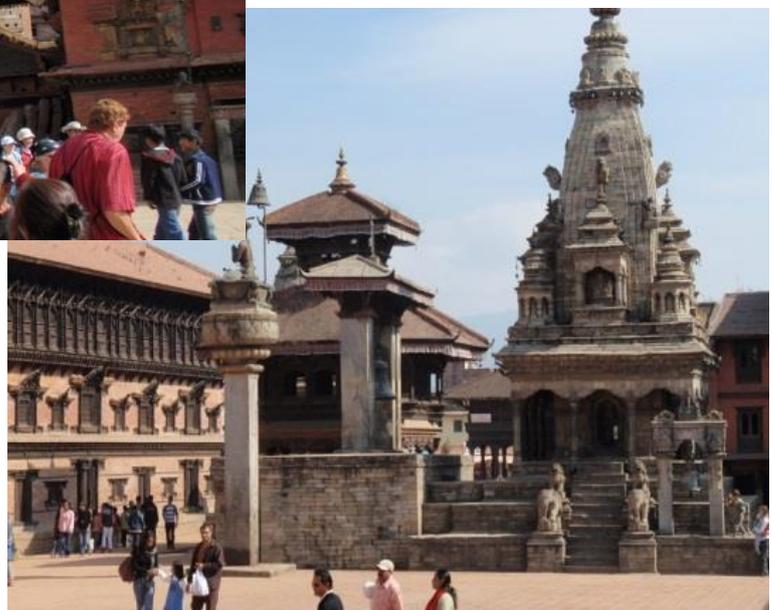
カトマンズ市街から東方には一本道の幹線道路がヒマラヤを越えて中国国境まで通じているが、とても埃っぽい道路で車も輻輳しているので、今回はタクシーを奮発することにした。タクシー代はいくら高くても往復 1000 ルピー（約 1700 円）と踏んだが、運チャンは 3000 とノタマツた。遠い、道が悪い、車が混んでいて走れないなどとゴタクを並べ立てた。何をぬかすかコン畜生メ。運チャンにとっては 1000 でも 1 日の稼ぎでお釣りが来る額ではないか？いつものとおり、言い値の半額 1500 までは OK させたが、これ以上はビター文もダメだという。それならいいよ、別のタクシーを探すからと交渉を打ち切って歩き出したら、すぐに追っかけて来て「1300 で乗れ」という。ここまでくればこちらの土俵に引き込んだも同然、乗り込んで、1000 なら乗るがそれ以上なら行かないヨとダメを押しして OK させた。

なるほど、運チャンの言うとおりの道は大型トラックなどで大混雑、おまけに舗装も無い凸凹だらけの道だから着くのに 1 時間くらい掛かった。どこの観光地でもそうであるが、タクシーを降りるとすぐにガイド氏が纏わりつく。ここは初めての場所だし、胸に“OFFICIAL”の名札もぶら下げていたので、よろしく頼みました。雲助ガイドと違って説明も丁寧であったが、宗教心が無い小生にはチンプン・カンブンであった。

伽藍は静かなものだった。ここの伽藍の建築様式には独特の特徴があるようで、確かにパタンなどの伽藍から受ける印象とは異なっているものが感じられた。次ページ左の写真のように、階段の左右に聖人や獅子や牛や象の「狛犬」が混在し、下から上まで数段にわたって並んでいるのが特徴かもしれない。

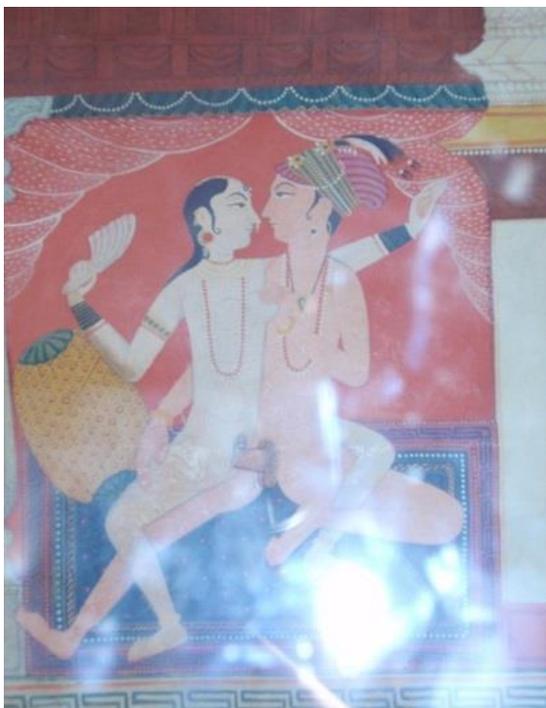


(←バクタプールの街並み)

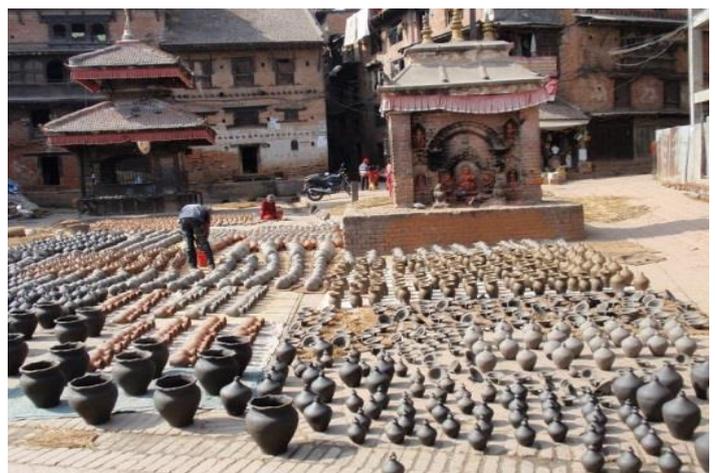




ガイド氏が、ここの博物館には面白い展示物があるから見て行けと勧めてくれた。素朴な博物館には古い曼荼羅がズラッと掛かっていた。曼荼羅には宇宙や輪廻転生を表わした抽象的なものや、王侯の宗教生活を表わしたもの、精神の解脱に必要な肉体の愉悅を解いたものなど多数が展示されていた。私は根が下司であるから、どちらかと言えばつつい後者の方に目が行くが、王侯の曼荼羅も見事なデザインであった（右）。



この伽藍では陶器の生産が盛んに行われていて、広場では須恵器を所狭しと並べて乾燥させていた。太陽が燦々と降り注いでなんともノンビリした風景であった。



この伽藍にはネパールで最大と言われるリングがあるそうで、ガイドに頼んだらすぐに案内してくれた。リングとは梵語で「象章、しるし」の意味であるが、転じて生命の源である男根を表わす。小生などは下司の意味しか知らないが、ガイドの説明によると、梵語では「リング」は「豊饒」や「正義」や「世界の中心軸」や「悟り」を表象する深淵な哲学世界の言葉であるそうな。雲の上に聳えたつ高山もリングと言うらしい。モノが貧弱な小生は自分の一物からして、そのような精神の深淵を覗くことができないのが悲しい。このガイドは見かけによらず聖哲なのであろう、客人が単なるアチラ方面の興味だけでこのリングを見たいという魂胆を見抜かれたような気がして、些か恥ずかしかった。リングは道の上にも彫られていた。上を歩く御婦人のヨニを下から拝謁する仕掛でもあろうか。

見物が終わって彼にガイド料金を尋ねたら、「喜捨で結構」とのことだった。やはり聖哲であった。雲助に掴まるといけないからと下のタクシーまで案内してくれた。喜捨はたっぷりと弾んでおいた。



(ネパール最大のリング。人物は聖哲ガイド)



(道の表面に彫られたリング)



(バクタプール伽藍の裏街風景)



(途中で見た葬列)



(行き倒れ。既に死んでいるのか?)

(「東の仏教伽藍 バクタプール」 完)

【カトマンズ・バレー点描 完】

[⇒「遥かな山々 私の山旅・海外編」目次に戻る](#)